（様式５）　　令和２年度　　教職大学院派遣研修　研究報告書

派遣者番号	Ｒ２Ｋ０５	氏　名	長岡　恭平
研究主題 ー副主題ー	小学校高学年における一部教科担任制導入に対する示唆 ー「授業交換型」一部教科担任制の実践を足掛かりとしてー		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	細戸　一佳　　清水　静海
所属	世田谷区立烏山北小学校	所属長	畑　和男

キーワード：一部教科担任制　専門性の向上　学年経営

１　研究の背景（目的）・主題設定の理由等

中央教育審議会は、令和元年６月より特別部会を設置し、「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「答申」）の取りまとめに向けて議論を進めてきた。今後の初等中等教育の方向性をまとめた本答申の「９年間を見通した新時代の義務教育の在り方について」の項目では、令和４年度を目途に、小学校高学年からの教科担任制の実施を掲げている。今後、各小学校では、実施に向けた準備が求められることになるであろう。

一般的に、小学校における教科担任制のよさとして、教員の授業力の向上や学級間の「差」の解消、教員の負担軽減などが挙げられている。しかし、他方、受けもつ学級で指導できる時間が減ることにより、児童の変化に気付きにくくなることなどが課題として挙げられている。

筆者は、前任校において授業交換型の一部教科担任制を経験し、多くのよさを体験してきた。筆者が経験したよさとは、授業準備に関わる負担感が減ったり、担当した教科のスキルが高まったと感じたりしたことである。しかし、現在、交換授業型の教科担任制を経験した教員は多くない。「筆者が経験してきたよさ以外の課題も、何か潜んでいるのではないか。」そのような疑問が、本研究に取り組もうと思ったきっかけの一つである。先行して一部教科担任制を経験してきた教員への調査を行うことにより、令和４年度から本格的に実施される高学年の一部教科担任制の導入の示唆が得られると考えた。

以上を踏まえ、本研究では授業交換という方法で一部教科担任制を先行的に導入してきた実践者にインタビュー調査することを通して、令和４年度から始まる小学校高学年における一部教科担任制の導入に向けた示唆を得ることを目的とした。

２　研究の方法

⑴　文献･先行研究

中央教育審議会の審議の経過を、「答申」作成に向けた議事録や配布資料を基に調べた。また、先行実践をまとめた文献等に当たり、小学校教科担任制の成果と課題を調べた。

⑵　実践者インタビュー

ア　対象

一部教科担任制経験者（学年主任）への調査、一部教科担任制経験者（非学年主任）への調査、兵庫型教科担任制経験者への調査、中学校教員経験者（完全教科担任制）への調査を行った。

イ　調査方法

インタビューは令和２年８月から 11 月に行い、半構造化面接法を用いた。事前に用意した質問事項は、相手が語る際のきっかけとするものとし、一部教科担任制に関する思いやエピソードを自由に語ってもらった。また、インタビューは調査対象者の了解を得て録音し、テキストデータ化した。分析に関しては、テキストデータ化したものを一文ごとに区切り、文にラベルを付け、付したラベルをカテゴリーごとに整理し、考察を加えた。

３　研究の結果

⑴　「答申」における教科担任制導入の目的

義務教育の目的・目標を達成する観点から、「答申」では、導入の目的を以下の三点に大きく分けて示している。

目的１：系統的な指導による円滑な中学校への接続
目的２：教師の授業の質の向上と児童の学習内容の理解度・定着度の向上と学びの高度化
目的３：学校教育活動の充実や教師の負担軽減

なお、令和元年 12 月の「新しい時代の初等中等教育の在り方　論点取りまとめ」の段階では、目的の一点に、児童・生徒の心のケアが入れられており、複数の教員による多面的な児童・生徒理解によって心の安定が図られることも挙げられていた。

⑵　先行研究における教科担任制のよさと課題

髙階（2006）は、授業交換型の教科担任制のよさとして、指導教科が少なくなることから、その教科に専念でき、教材研究が深くなり、指導が充実することや、教科の専門性が高くなり、教員も子

供も満足感が得られやすくなることなどを挙げていた。一方、課題としては、交換授業や専科教員の場合、子供とのふれあいが教科の時間に限られるため、個々の子供の理解が十分できにくいことや、教科担任は一人の場合が多いことから、教科指導について独善的・閉鎖的になりやすいことなどを挙げていた。

⑶ 実践者インタビューの結果

ラベルを付してインタビュー内容をカテゴリーごとに分類し、「運営に関すること」、「学年経営・学級経営に関すること」、「教科の指導に関すること」、「その他」とした。「運営に関すること」では、授業交換を行うためのマネジメントに関する内容が多く、時間割を作成する難しさや、授業時数の管理の仕方などが課題点として挙げられた。「学年経営・学級経営に関すること」では、メリハリが出ることや担任との関係がうまくいっていない児童でも他の教員との関わりができることなど、心理的負担感の減少等が意見として挙げられた。「教科の指導に関すること」では、先行実践でも明らかになっていたように、多くの教員が専門性が高まったことを挙げていた。「その他」の視点として、若手教員に有効であるという意見も挙げられた。

4　研究の考察

⑴ 教員の専門性をどのように向上させるか

授業交換がうまく機能していなかった場合の共通点として、教員間の授業力の差が挙げられた。教科担任制となった場合、様々な教員が児童と関わることが増える。指導力に差があると、担任は、「クラスに入られたくない。」、「指導力の差を児童に悟られてしまう。」、「自分の指導法で学級経営を行いたい。」と思い、教科担任制に非協力的になる可能性がある。そのようなことを避けるためにも、「小学校教員としての専門性がある。」、「どの教員と関わっても大丈夫である。」と胸を張って主張できるようになる必要がある。教員の専門性をどのように向上させるかという点が今後より一層重要になってくる。

⑵ 運営をどのように行うか

高学年において、例えば、現段階の専科教科に、外国語科、理科科、算数科の３教科が入るとする。時間割の複雑さという点においては、今以上に手間がかかることは容易に想像できる。インタビューした学校の例を紹介すると、完全教科担任制の中学校では、教務主任が一括して、毎週の時間割の調整を行っていた。また、一部の小学校では教科分担を行うために、学級担任をもたない「チーム・マネージャー」を配置して時間割の調整などを行っている実践もあった。このような例から、現在よりも複雑になる授業時数の管理等を行う教員の役割を、学級担任とは切り離したものとして新たに作るこ必要があると考える。

また、開かれた学年経営を行うことも、教科担任制を小学校に導入する際にポイントになると考える。学年経営案を共有し、児童に関して自由に意見を言い合える関係を今以上に築く必要がある。学年主任は、閉鎖的な空間を脱却する支持的風土のある学年を経営していく必要がある。

5　今後の展望

研究を進めるにつれて、「小学校らしい教科担任制」を目指していく必要があると強く感じた。完全な教科担任制ではない「一部」教科担任制という点に、「小学校らしさ」が現れていると考える。ある小学校の教員へのインタビューの中で、印象的な言葉に出会った。それは、「中学校の先生のようになりたかったのではない。」という言葉である。今後、小学校高学年において一部教科担任制が導入されると、ある特定の教科の内容は、学級担任ではない専門の教員が教えることになる。しかし、多くの時間は、学級担任と過ごすことは変わらない。学級担任のよさと教科担任制のよさを掛け合わせることによって、児童にとって最適な教育を提供することが大切であると考える。

教員の専門性を向上させ、チーム学校でよりよい授業を児童に提供すること、よい授業を行うための準備時間を働き方改革によって捻出すること等、それらのために我々は、考え続ける教員を目指し、より主体的・積極的に授業改善や業務改善に日々取り組んでいく必要がある。今後の目指すべき方向性はこのような視点が重要になるのではないであろうか。